

別府湾の謎に迫る

瓜生島と沖の島について

大分大学名誉教授 加藤 知弘

「瓜生島」調査のきっかけ

昭和五十二年（一九七七）当時「大分自然を守る会」という市民の運動団体があって、自然保護・文化財保護運動に活発に取り組んでいた。

同三十九年新産都市指定を受けた大分市臨海部には、石油コンビナートや新日本製鉄所などが立地し、次々に操業を開始していた。それに伴って、公害問題や自然・文化財保護問題が大きな社会問題になっていたのである。

その一つに、臨海部埋立地の地盤の安定性が問題にされていた。そこで急浮上してきたのが、別府湾に浮かんでいた「瓜生島」を一夜にして海に沈めたという、慶長の大地震・津波であった。

同年二月の総会で「大分自然を守る会」は瓜生島の科学的

調査を行うことを決定、その責任者に私が指名された。こうして当初、特別部会「瓜生島調査会」として発足したが、七月末瓜生島シンポジウムを行う頃には独立した組織のようになっていた。

この頃私の書いたメモをみると「瓜生島の存在、および慶長の大地震についての三つの立場」として、①今津留（鶴）村沖の浜とする説、②元禄以降（つまり『豊府聞書』以後）の諸文書でいう瓜生島説、③笠祖郷が瓜生島であったとする説、④その他神宮寺浦についての検討、と書かれていて、それぞれの項目に史料と注釈が述べられている。①②④については、これから述べることを読んで頂ければ分かると思うが、③についてはここで簡単に説明しておきたい。『和名類聚抄』（九三〇年編集、略して「和名抄」）などに大分郡に九郷あった阿南・植^{わさ}・田・津守・荏隈^{えのくま}・判田・跡部・笠祖・笠和・神前のうち、笠祖だけは該当する位置が不明である。従ってこの郷名が海没した瓜生島であるという説と笠和の誤写とする説がある、というのである。

いずれにせよ、信頼できる当時の内外史料から言えること

は、沖の浜という港町が存在していたことはほぼ確実であること。その港町が一五九六年（慶長元年）九月、大地震と津波によって海底に没したことも史実であることから出発して「瓜生島」の謎に迫ることにした。

そのためには、先ず①②③④に分類される資史料を可能な限り収集して考証し、沖の浜港の存在と海没の事実の再確認、その位置の推定、海没のメカニズムの推定などを文献資史料を利用して調査を開始した。海上での調査はその間に学際的な研究者に呼びかけて参加してもらい、文献上の調査結果が出て実施することとした。

◇ ◇ ◇

以下に述べることは、このような実際の調査経過によらず、海上調査を含めて調査で得た結論をまとめる形式で論述することにする。

「瓜生島」調査の基軸は沖の浜だった

「瓜生島」調査を計画し、実施するに当たって、研究者たちから聞こえてきた少なからざる声は、“伝説に過ぎない島”をまともに調査することに対する懸念であった。

止めたらと忠告してくれる人や「島があってもなくても調査は調査だ」と慰めてくれる人、中には失笑する人もいた。こんな中で、進んで調査スタッフに参加してくれた研究者たちに感謝しなければならぬが、私としてはこれらの仲間たちの期待を裏切らないだけの確信はあった。

それは“国際貿易港沖の浜は実在した”という文献調査からの明確な結論にあった。この“海に沈んだ港町”と「瓜生島」の関係を明らかにすることは、筋の通った学術的研究調査になる筈であった。

海上調査を行う直前に「調査会」が刊行した『沈んだ島』所載の吉川恭三京大教授（故人）との対談で「沖の浜港については、確実と思われる史料がありますけれども、南蛮貿易の基地でもあり賑やかな町でもあったこの港が水没したことだけでも、大変な問題だとおもいます。それで確実なこの港から探ることにした」と述べている。

昭和五十二年（一九七七）八月初旬に実施した第一次海底調査での調査地域は、沖の浜関連史料を基本に設定した。九月初旬の音波探査機を使用した第二次調査でも、同じ沖の浜所在推定海域、春日浦埋立地から五号埋立地沖合いを調査した。翌年出版された『瓜生島沈没』という著書でも「このよ

うに調べてくると、多くの船の寄港地であり、揚陸地である住民の多い大きな村、沖の浜の存在は、疑問の余地がなさそうである。あったからだと言っている。

昭和五十六年（一九八二）年度の『大分大学研究紀要』に発表した論文「府内沖の浜港とその海没遺跡調査報告」の前文で、私は次のように書いている。

「大友宗麟時代とその前後、豊後府内の町が東西交渉史上大きな役割を果たしたことは、いまさら言うまでもない。府内の外港であった沖の浜港についても、同様の歴史的役割が認められるべきであるが、現在のところ、その所在位置すら定かではない。府内そのものの歴史考古学的調査が行われていない現状では、このこともやむを得ない。しかし、この港には東西交渉史上重要な人物たちが足跡を残しており、ポルトガル・明などの外国文献にもその名をとどめている。文禄五年（慶長元）閏七月（一五九六年九月）、沖の浜港は地震・津波で海底に没したが、この事件が有名な瓜生島伝説のルーツになっていることは間違いない。」

ここで述べている通り、国際交易都市府内の町は、その港沖の浜を抜きにしては考えられない。現在、行われている大友府内遺跡の発掘調査で再評価されるべきである。

大友府内遺跡の発掘調査によって、主として義鑑・義鎮（宗麟）・義統三代の遺構、遺跡、出土品が出ている。上の原館（上野東）の遺構がいかにも守護館らしいのに対して、顕徳町の館跡は、比較的防御に手薄な御所風な建築物を思わせる。町並みの遺跡は沖の浜と結ぶ大分川に沿っており、数多い華南・東南アジアからの舶来の陶磁器などの出土品から、府内の国際交易都市としての性格がますます明確になってきた。

前記論文で「府内そのものの歴史考古学的調査が行われていない現状で」は、沖の浜（瓜生島）の果たした歴史的役割も明確にしがたいとしていた。この機会に「瓜生島調査会」がかって十余年にわたって実施した文献調査と海上調査を振り返り、最近の大友府内調査と結びつけながら、沖の浜港と大分川の通商上果たした重要性をまとめてみることにする。

神宮寺浦に港はあったのか？

府内の南蛮貿易の港として郷土史書などに名前が挙げられるのは「神宮寺浦」「瓜生島」「沖の浜」で、中でも神宮寺浦が大分市民には最も親しまれてきた。例えば「大分市歌」の第一節は、

豊の海に 陽はのぼり

神宮寺浦 波静か

宗麟この地に、文化を開き

.....(以下 略)

とある。大分市春日浦神宮寺浦公園に立つ記念碑には、この市歌の意味にそって

「神宮寺浦 南蛮貿易場址」(大分県知事阿部嘉七書)とある。

神宮寺浦に南蛮船が来航し、南蛮貿易を行ったとする伝承は、郷土の歴史書『豊後国志』(岡藩の儒者で医者の唐橋世濟が寛政年間に著述)や『雉城雜誌』(府内藩の儒者阿部淡齋が天保年間に編著)などの記述するところに従ったものであろう。

神宮寺浦公園碑などを根拠にしているが、例えば『豊後国



神宮寺浦公園碑

志』にはこうある(原文漢文を平易な日本文に改めた)。

「南浦文集の述べるところによると、天文十年(一五四一)旧暦秋七月、ポルトガル国より突き進む大きな海洋船一隻があった。この船は直接に豊後の神宮寺浦に到着した。また同十二年旧暦秋八月、その人たちは六隻の大船に乗って来たが、その後毎年やって来た。野史(民間の人が編纂した歴史)が述べるところでは、大友義鑑はそれらがもたらす貨幣・布と絹を喜び、交易(互市)を許して、同時にキリスト教を受け

入れた。茅元儀の『武備志』には、西蕃のポルトガル国のフランシスコは火繩銃（鳥銃）を日本の豊後に伝えた、と述べられている。」

『南浦集』や『武備志』からの同じような引用記事が『雉城雑誌』にも所載されている。「天文十年七月廿七日唐船が豊後の神宮寺に到着して、明人二百八十八人が来朝……と「十二年旧曆八月七日明の商船五艘或いは六艘が来着……」とかの記事が『大友興廃記』『豊薩軍記』などにも所載されている。

これらの記述のポルトガル船、明船の来航の時期であるが、ポルトガル人が日本に初めて来航したのは、一五四二年か三年（一五四二〜三）で意見が分かれてはいても、明のジャンク船で種子島に上陸した時のこととされている。このことはボクサー、岡本両教授などの内外記録・史料を駆使しての考証から否定のしようがない。

◇ ◇ ◇

さらにポルトガル人六、七人を乗せたジャンク船が豊後府内の港に初めて来航したのは、大友宗麟が彼の追憶談で語ったように「私が十六歳（数え年）の時」で、「シナから日本

に来る船の航海の始まった時」であった。宗麟は一五三〇年の生まれであるので、「府内に近い港」（沖の浜）にこのジャンクが入港したのは、一五四五年（天文十四年）のことで、宗麟自身の証言から『南浦集』『武備志』の記事の誤りは明らかである。

◇ ◇ ◇

次に神宮寺浦の場所であるが、『豊後国志』は「海浜に春日社（祠）があつて、その側に寺があり、神宮寺という。神務を掌るゆえにあるいは神宮寺浦という。船舶の集まる場所である。」と述べ、『雉城雑誌』も「春日社および勢家町の浦をいう」と述べている。つまり春日神社の裏の海が神宮寺浦である。

ところが問題は、神宮寺浦に該当する春日神社北裏の海岸地域には港が存在しないことである。正保年間（一六四〇年代）の「豊後府内城下絵図」（国立公文書館所蔵を複製）には府内の港として大分川（古河）河口から入る堀川港（京泊）が描かれており、勢家浦町、勢家町の浜には港の記載はない。むしろ堀川港入り口には「河口遠浅にて小潮の時は船入りかね申し候」と記入されていて、江戸期には府内藩が良港に恵まれていなかったことが知られる。

瓜生島と沖の浜

文化元年（一八〇四）に編纂が完了した『豊後国志』には、唐橋世済（たのむらちくてん）に協力した田能村竹田（たのむらちくてん）ら作製の八郡絵図が付せられているが、大分郡絵図の勢家、春日浦の海岸には砂浜と松林と思われる図が描かれ「神宮寺浦、天文十年七月ポルトガル国人ここに来て鳥銃を伝えたことは武備志に見える」との記入まであるが、もちろん港の記入はない。

港がなくとも沖に停泊して解（はしけ）で砂浜と往来したとのいささか強引な説もあるが、九州各地の南蛮船来航の港を調査してみれば、現在でも港として利用されている地形の所ばかりで、遠浅の砂浜の沖に例外的に投錨することはあっても交易の港として利用した例はない。

以上、神宮寺浦南蛮船来航説は否定せざるを得ない。唯これらの記述に全く根拠がないわけでもなく、かつて春日浦沖にポルトガル船、明船の来航した南蛮貿易港が存在し、港が消失した後もその記憶が残っていて、神宮寺浦と南蛮船が結びついたと考えられる。

大友時代の府内遺跡の発掘が進むにつれて、東南アジアや華南地方産の陶磁器などが多数出土している。これらは堺や博多の同時代遺跡と比較してもかなり多いと発掘担当者は言っている。

堺や博多にはポルトガル商船（ナウ船）の直接の来航はなかったが、堺も博多も国際交易の中心都市として広範囲なアジア地域と交易を行っていたと考えられるので（ポルトガル船の入港地は、元龜二年（一五七二）年以後は主として長崎である。堺・博多の商人は、長崎へは多くは和船で往来していたであろう）、府内での出土品原産地の地域の広さとその量の多さは注目に値する。

私は府内が海外との交易を行ったルートとして、次の三つを想定している。

- (1) 博多經由主として朝鮮・中国と交易、博多の豪商が仲介業者の仲介
- (2) 琉球・種子島經由主として華南、東南アジアとの交易
- (3) 直接、沖の浜から日本人船頭と水夫、または中国人密輸業者の仲介

ポルトガル船は確認されるだけで一五五一、五六、五八、五九、六〇年に沖の浜に来航、交易を行っている。これらの船は、南シナ海の港（一五五七年からはマカオ）から直接日本に来航している。

◇ ◇ ◇
このように考えれば、交易地域の広さと量の多さの説明がつくのではないか。

年代確定法などの進んだ最近の歴史考古学の発掘調査は、文献上だけからは推定できなかった事実を明らかにするものである。こうして国際交易都市としての府内の姿が明らかにされていく中で、その国際的窓口で貿易港であった「沖の浜」港の評価もまた高まらざるを得ないであろう。

沖の浜の存在を史実として捉え、改めて「瓜生島」に関する記述を読み直してみると、新しい観点が出て来る。

ルイス・フロイスは在日三十四年である。五畿内駐在が長かったが、九州に戻って直ぐ豊後地区上長になり、四年余勤めている。宗麟が洗礼を受けた時期であり、従って豊後の事情にも通じていた。少年時代王室の秘書庁にいたし、イエズス会の神父になってからも秘書役を務め、上司の評価は文筆の仕事に優秀とある。

沖の浜海没に関して彼がローマのイエズス会本部に送った『日本年報』の記述は、「府内から約一レグアほど離れた海岸に、多くの船の寄港地であるオキノハマと呼ばれる大きな港町がある」と書き始め、当時長崎にいた彼を訪ねて府内からやって来たブラスというキリシタンの遭難の談話を、そのまま書き綴っている。この報告は疑いの余地がなく、沖の浜という「多くの船の寄港地」沖の浜港の実在とその港が地震と津波で海に沈んだことを確信させるものである。

実のところこの報告と、瓜生島に沖の浜があったとする『豊府紀聞』などが慶長元年閏七月十二日に地震と津波で島もろとも海に沈んだとしていることは、ほぼ一致する。跡は両方のいう位置が一致すれば、沖の浜と“瓜生島”は重なってくる。

◇ ◇ ◇
前述のようにフロイスの一五九六年度『日本年報』では府内と沖の浜の距離を約一レグア（ポルトガルでは約五キロ）と書き、『日本史』では「（府内の）市から半里離れたところにある船の停泊地、沖の浜」*と述べて、五キロから二・五キロと少し幅がある。そこで明の使者鄭舜功ていしんこうの述べている数字を見てみたい。

彼は倭寇の取り締まりを要請し、あわせて日本の国情を調査する目的で来日した。大友氏や大内氏が將軍よりも勢威があることを知った彼は、大友義鎮のもとに来て二年ほど府内や臼杵に滞在した。帰国して『日本一鑑』を著述したが、その中の「桴海図経」に澳濱（沖の浜）の名前が出てくる。

…入澳濱策馬往見豊後君・澳浅膠舟不堪繫泊陸行府内凡五六里…

（沖の浜に入港し、馬に鞭打って行き大友義鎮の君に会った…：海の湾入した所は浅くて船が底に着いて碇泊できないので陸地伝いに府内まで約五、六里あった…）

岡本良知教授は「これをいいかえれば、府内沿岸は遠浅であって船が停泊できないから、沖の浜に投錨した。それより府内へは陸路五・六里あるということである。この五・六里は中国里であるから、日本の一里未満である。」と注釈されたが、問題は“澳浅く”の澳の読み方で神戸大分大学名誉教授はこれを沖の浜の略とされているので沖の浜の港が浅くて船が底着いて停泊できない、と読めることになる。

岡本教授は、フロイスなどの記述と突き合わせて、沖の浜

で下船して陸行したと読まれているのであろう。鄭舜功がわざわざ陸行と断っている意味は、沖の浜で大型船を降りて小舟で府内に行くか、陸を行くかのどちらかで、小舟で行くのが普通であったのであろう。いずれにしる沖の浜は完全な島ではなく、府内まで三―三・六キロ（中国里は約六〇〇メートル）の所にある港であったと考えられる。さらに「馬に策（むちうち）て豊後の君（大友義鎮）に見（まみ）ゆる」とあるのは陸続きであることを語るとともに、鄭舜功の示す距離から馬の利用は十分納得がゆく。

これに対して、ザビエルが大友義鎮を訪問した時は、ガマ船長以下高価な衣服を身にまとったポルトガル士官や商人とその従僕たちは、沖の浜に停泊する母船から小舟に分乗して大分川河口に入り、府内の船着場に到着している。その後、出迎えの家臣たちとともに府内の町筋をパレードして大友屋敷に向かったが、府内の街路は見物の町民で黒山の人だかりであったという。（S・ゴンサルヴェス『東インド・イエズス会史』、G・シュールハンマー『ザビエルの生涯、その時代』による）。

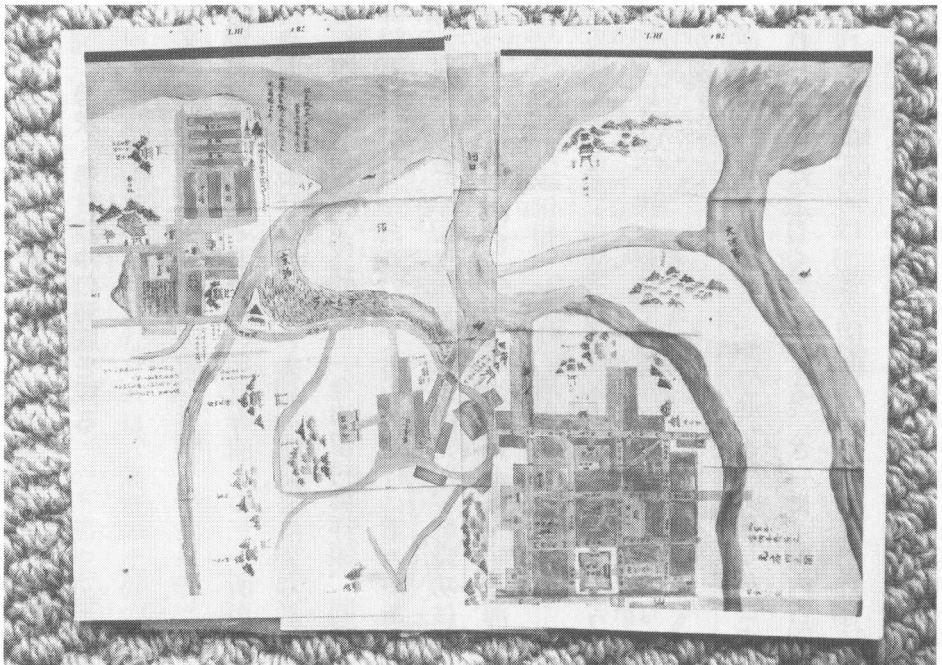
このようにフロイスの『日本史』、『日本年報』など、鄭舜功の『日本一鑑』などの記事から沖の浜と府内の距離を平均して推定すると大体三・三・五キロぐらいかと考えられる。

◇ ◇ ◇

次に、府内からの沖の浜の方角である。『日本史』の記事およびリンスホーテンの『ポルトガル船航海路程記』の記述が多少の手がかりを与える。

『日本史』8の島津軍に追われてカリオン神父らが府内を脱出する時「まだ府内から出てしまっていないうちに、市から半里離れたところにある船の停泊地沖の浜の村落が焼けるのが見られた」との記事がある。これから推定されるのは、沖の浜が大分川右岸で東北の今津留にあったとすれば、西の院内妙見城^{みょうけんじょう}を目指して脱出している神父たちにはこうは見えなかっただろうし、勢家の北あたりの海岸を想像すればうなずけよう。

さらにオランダの旅行家で地理学者でもあるリンスホーテンの『ポルトガル船航海路程記』が「…そしてこの川（大分川）の中では、干潮時、船は（川底の）砂の上に止まる。この河口近くにアキノハマという小さな町があり、半マイル上流に行くと、豊後王国最大の都がある」と記述している



高山虔三所蔵の「府内古図」。何度も転写されて新しい情報が混入しているが、基本的な点はそのままと伝えている。

ことが、位置推定の手がかりを与えるだけである。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そこで沖の浜は「瓜生島」にあったとする『豊府紀聞』の記述を見てみると「府内城（江戸期）の西北二十町余（約二キロ余）に勢家村があり、勢家村の北二十町余に「瓜生島」（沖の浜）があったと書いている。

これをもとに府内城と「瓜生島」を直線で結ぶと『雉城雑誌』の「府内城の西北三十一町四十間（約三・二キロ）」とほぼ一致するだけでなく、府内と沖の浜の前述の推定距離三―三・五キロとも符号する。

大友府内遺跡の発掘調査が進むにつれて、いわゆる「府内古図」の信頼性が高まってきているが、「古図」の大分川の大きく広がる河口の左岸に、そこには同時に春日神社の北に大きく突き出た半島状の陸地が描かれ、その先端に沖の浜の地名が記入されている。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ローマのイエズス会文書館から持ち帰られ、臼杵図書館に所蔵されている“沖の浜海没”の報告をフロイスがローマのイエズス会本部に書き送った『一五九六年度日本年報』には、ポルトガル語で“島”とは書かず、沖の浜は“海岸部”

にあると書いており、「古図」の記載と合致する。

勢家・春日浦沖の海底を探る

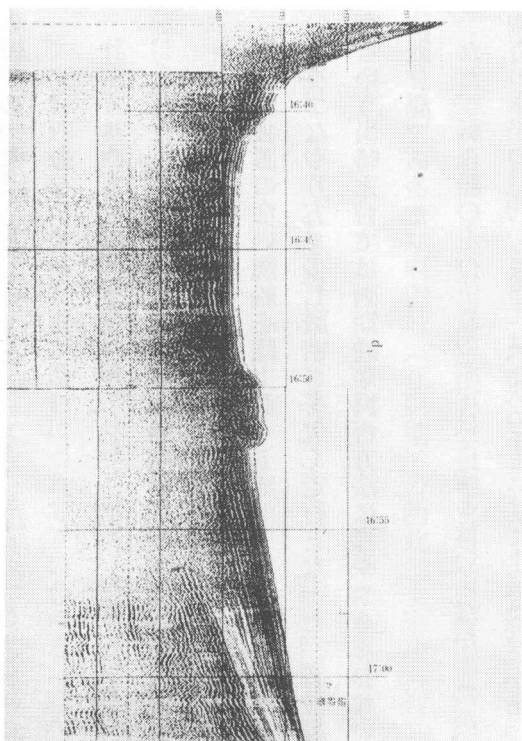
文献史料から、南蛮船・明船の来航した「実在した沖の浜」
「伝説的な瓜生島」「港のない神宮寺浦」の三ヶ所が勢家・春日浦の沖に集中、重なってくるのは偶然と思えない。『中川史料集』『北村清士校註』に「今津留村御拝領、同所沖の浜御船着となる」とあるのは文書史料だけに重みがあるが、陸行（府内から今津留は大分川の対岸だが、鄭舜功は陸伝いにいった）、大分川河口の海の港（『ポルトガル船航海路程記』『日本史』『日本年報』など）、府内からの距離三―三・五キロの海岸部、地震と津波で海没（各史資料）というようにチェックしていくと、狭い意味での今津留村では該当しないことが分かる。

逆に勢家・春日浦沖に“沖の浜”が所在したとすれば、これらの条件に正しく当てはまる。さらに「府内古図」に描かれた大分川の河口一帯の図面は、このことを裏付けている。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

かくして、われわれは「確実な沖の浜」の痕跡を勢家・春

層となる。



東西に走行する調査船が一定の海域に入ると海底地層の「乱れ」を記録したことで、この一帯で大規模な地崩れか、それに類するものが起こったことが推測された。これは「沖の浜」海没のメカニズムを解明するだけでなく、その所在位置の推定の重要なカギとなるものであった。

勢家・春日浦沖の海底は、沖合い二キロ、水深四十メートルの辺りまで斜面が続き、その先は平板な海底となっている。従って海底地層の「乱れ」が大規模な地崩れとすれば、斜面

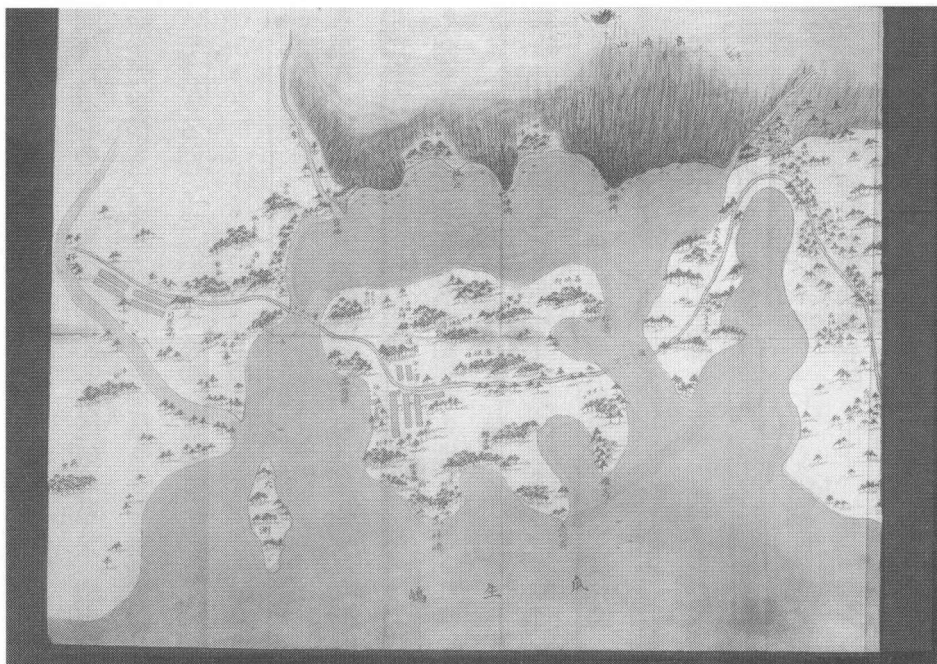
に沿って流れ落ちた土石流は、斜面の先端付近で止まったはずである。もちろん二日目は調査船を岸から沖の浮き灯台を目指して走らせ、海底が平らになる付近で船の舵を直角に切って、しばらく岸に平行に走らせ、再び岸に向かった。その結果がこの海底地層記録である。

岸からの斜面が終わる辺りで「乱れ」が整層に変わるのがはっきり分かる（土石流先端付近の盛り上がりⅡ図の中央Ⅱの下に、断層が見られる）。

“沖の浜”の港町は、各史料から推定されたように春日浦旧海浜から七、八百メートル沖合い付近に存在していたが、（陥没ではなく）地震と津波で海底に崩れ落ちたと推定される。“沖の浜”の港と港町があったと推定される地点から広がる大きな地崩れの発見によって、調査は大きく前進をみたのであった。

別府湾全域に「瓜生島」を探る

では、別府湾の大半を覆うように「瓜生島」が描かれた、いわゆる「瓜生島古図」（最近の発掘調査で信頼性を高めた「府内古図」とは別もの）との関係はどうなのか。それに地



「瓜生島古図」大分の旧家で瓜生島の庄屋をしていたと伝えられる幸松家所蔵のもの
 (原図は戦災で焼失) 浜脇から久光島が半島のように突き出している。

震と津波で港町を一夜で海に沈めた別府湾の地質構造はどうなのか、どうしても別府湾全体の海底地層を調査しなければならなくなった。

この大野川左岸と杵築市加貫崎を結ぶ線より内側の別府湾全域を対象とした調査は、昭和五十五年(一九八〇)六月、翌年十月に、大分大学「別府湾基礎調査」として実施された。志賀史光教授(化学)の提案で、教育学部歴史、地理、化学、地学四学科が別府湾の共同調査を行うことになり、これに京都大学琵琶湖古環境実験施設が協力、太井子宏和助手を派遣、音波探査機を貸し出してくれることになった。

実のところ、志賀教授がこの計画を提案した動機には、資金難で調査に行き詰っていた「瓜生島調査会」の調査を援助しようとの考えが含まれていた。その代わり調査船の手配、京大との下交渉、調査測線の設定などは「調査会」が行い、大分大外部からは「調査会」の主要メンバー、由佐悠紀京大助教授、平田登基男九大助教授、高松史朗マリンパレス館長、高橋俊正熊大教授らが参加した。

この調査で得られた結果は学術的に価値の高いものであり、

その後多くの研究者の関心を別府湾に引き付けることとなった。だが、この「共同調査」の頃は研究者の間では「瓜生島」調査なるものの意義を否定する雰囲気があり、調査が実現に至った事情も考慮して、データ全体を「調査会」の分析で公式発表することは差し控えたのである。

◇ ◇ ◇

事情は変わって、大友府内遺跡の発掘調査が進められている現在、終始「調査会」の海底調査に参加した京都大学付属地球熱学施設の由佐教授と討論して、改めて当時からわれわれが考えていた見解を述べてみる。

(一) 島が別府湾の大半を覆うように描かれた古図にある、

いわゆる「瓜生島」の痕跡は、この二度にわたる地層探査（基本測線は別府湾南岸から北岸に至る五測線、間に南岸から湾中央部に至る二測線、それに湾奥から湾口に東西に走る測線数本）からは発見されず、さらにサイドスキュンソナーによる海底面調査（百メートル幅で海底面の映像を映し出す、「共同調査」後の調査会の独自調査）でも発見されなかった。従って“沖の浜”（瓜生島）所在は勢家・春日浦沖の一点に絞

られてくる。

(二) 別府湾全体には予想以上に活断層が多く、「沖の浜海没」のような事件は別府湾内を震源地として十分起りうる。別府湾全体では絶えず南北に引っ張る力が働いていると考えられる。

なお、由佐教授は昭和六十四年（一九八九）に発表した論文「音波探査の異常から推定される別府湾のガス」の中で「別府湾海底下のガスが慶長元年（一五九六）に沖の浜港を消滅せしめた地震に伴う地崩れの際、堆積物の液化化 \parallel 地震の際、たい積層地盤などが液化化し崩壊する \parallel に寄与した可能性もある」（『第四紀研究』）と述べている。

宗麟の後継者吉統は朝鮮の役での不覚を咎められて改易、四百年にわたる豊後大友氏の歴史は終わった。その三年後、大友氏の全盛を支えた沖の浜港もこれに殉ずるかのごとく地震と津波で海に沈んだ。

現在進められている大友府内の「発掘調査」は、この港の果たした役割を広範囲な東アジアの舶載出土品から明らかにしつつある。われわれの行った調査が少しでもその解明に役立てばと願うものである。

(終)